年　表

❶～⑩は右に記事

1880年	9月	経済・法律専攻の専修学校（夜間2年制）設立。仮校舎（現中央区銀座5丁目）で開校式 ❶
1885年	7月	現在の神田キャンパスに移転 ⓐ
1886年	12月	私立法律学校特別監督条規により、専修学校など五大法律学校が帝国大学総長の監督下に置かれる ❷
1887年	1月	専修学校同窓会が誕生
1889年	9月	政治科を増設（1891年2月廃止）
1903年	11月	専門学校令により認可
1905年	10月	新たに商科を増設。初めて昼間の授業を開始
1906年	9月	大学部・専門部・高等専攻部・高等予科を設置
1913年	7月	校名を私立専修大学と改称 ⓑ
1917年	9月	専門部に計理科を増設 ❸
1922年	5月	大学令による旧制大学へ昇格（経済学部・大学予科・専門学校令による専門部）❹
	10月	学制頒布50年記念祝典で、学長・相馬永胤と学監・田尻稲次郎が教育功労者として文部省から表彰を受ける ❻
1923年	9月	関東大震災により校舎を焼失。同年12月に木造平屋建ての仮校舎竣工 ❺
1926年	1月	校歌・応援歌を制定
1927年	4月	法学部を設置
1928年	4月	専門部に商業科を増設（1932年10月に商科と改称）
1929年	4月	経済学部・法学部・大学予科の夜間部を新設。両学部とも昼夜二部制となる
1931年	6月	東都大学野球連盟の前身である五大学野球連盟の第1回リーグ戦で優勝
1939年	1月	第20回箱根駅伝で初優勝 ⓒ
1943年	10月	学生の徴兵猶予の停止により、適齢学生のため学内で出陣壮行式を挙行 ❼
1947年	9月	労働講座を開講し、翌年、各種学校の附属労働学院とする（1957年12月廃止）
1948年	10月	川崎市生田の日本電気の研究所跡を買い取り、新校舎に改装（現生田キャンパス）。授業は翌年4月に開講 ❽
1949年	4月	「学校教育法」による新制大学に移行、商経学部および法学部（昼間部・夜間部）を設置
1950年	11月	同窓会を「校友会」と改称
1958年	5月	ご父母・保護者の会である「育友会」設立
1962年	4月	経営学部を設置
1963年	4月	商経学部を経済学部と改称
1964年	9月	生田キャンパス旧3号館竣工 ❾
1965年	4月	商学部および商学部二部を設置
1966年	4月	文学部を設置
1968年	4月	商学部に会計学科を増設、専修大学美唄農工短期大学を設置（1973年4月に専修大学北海道短期大学と改称）
1972年	4月	経営学部に情報管理学科を増設
1973年	10月	現在の神田キャンパスに高層型の校舎竣工 ⓓ
1977年	11月	フランス革命関連史料を購入し「ミシェル・ベルンシュタイン文庫」と命名
1979年	9月	創立100年記念式典を挙行 ⓔ
1989年	4月	石巻専修大学を設置
1996年	4月	経済学部に国際経済学科、文学部に心理学科を増設
1997年	10月	生田キャンパス9号館（120年記念館）竣工
2001年	4月	ネットワーク情報学部を設置
2003年	2月	大学院社会知性開発研究センターを設置（2006年に社会知性開発研究センターと改称）
2004年	4月	大学院法務研究科（法科大学院）を設置
2006年	4月	法学部に政治学科を増設し、商学部の商業学科をマーケティング学科と改称
2007年	3月	生田キャンパス10号館（130年記念館）竣工
2009年	1月	向ケ丘遊園駅前にサテライトキャンパスを開所
2010年	3月	神田キャンパスに「黒門」復元 ⓕ
	4月	人間科学部を設置、文学部を再編して7学科体制とする
2011年	2月	創立130周年記念映画『学校をつくろう』公開
2012年	4月	法学部の全授業を神田キャンパスで展開
2013年	6月	専修大学北海道短期大学の閉学式
2014年	3月	神田キャンパス5号館竣工
	4月	新たな学士課程教育の導入
	11月	サッカー部が関東大学サッカーリーグ4連覇
2015年	5月	野球部が東都大学野球リーグ戦優勝、最多優勝回数を32回に伸ばす ⓖ
2016年	12月	生田キャンパス2・3号館竣工 ❿
2019年	4月	経営学部にビジネスデザイン学科を増設、文学部人文・ジャーナリズム学科を改組してジャーナリズム学科を設置
	9月	神田キャンパス9号館竣工
2020年	3月	神田キャンパス10号館（140年記念館）竣工
	4月	国際コミュニケーション学部を設置、経済学部を現代経済学科、生活環境経済学科、国際経済学科の3学科体制とする、商学部が神田キャンパスに移転

創立140周年記念特集

専修大学の軌跡

専修大学140年の歴史は、今年完成した神田10号館（140年記念館）で振り返ることができる。上りエスカレーターの壁面に、写真パネルを掲示している＝右写真。『ニュース専修』では、掲示写真を中心に、創立期から現在に至るまでの大学のあゆみをたどる。

1.「専修学校」の誕生

1880（明治13）年9月16日。この日、日本語で経済学と法律学を組織的に学ぶことのできる初めての高等教育機関として、専修大学（当時の名称は専修学校）は、銀座の地において誕生した。創立者は相馬永胤・田尻稲次郎・目賀田種太郎・駒井重格の4人である。

4人はアメリカの地で出会い、最新の法律学や経済学を学びつつ、これからの日本を支える人材の育成のための学校をつくろうと誓い合う。帰国後、その夢をかなえるべく、福沢諭吉や箕作秋坪といった大先達やアメリカで知り合った仲間たちの協力を得て、創立した学校が専修大学であった。

2. 五大法律学校

1886（明治19）年、明治政府は、現在の法政大学・明治大学・早稲田大学・中央大学、そして専修大学の5校を、帝国大学（現・東京大学）の監督下に置くことを定めた。これは私立法律学校への規制強化の一環でもあったが、同時に、卒業生に対して判事登用試験の優遇措置や徴兵猶予といった恩恵も付与した。そして、この恩恵を求めて入学を希望する若者たちが増え、5校の人気は高まっていくのである。

明治20年代になると、この五つの私立学校は、「五大法律学校」と世間に評され、討論会を開催するなど、互いに切磋琢磨して、多くの人材を法曹界に送り込んでいった。

3. 計理の専修

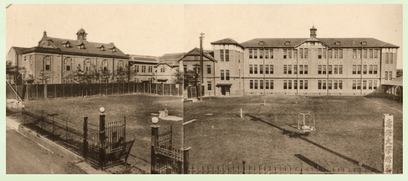
日本で初めての会計士制度である計理士法が制定されたのは1927（昭和2）年のことである。専修大学が、計理士養成を目的とした計理科を新設したのは、それに先立つ1917（大正6）年。いかに先見の明があったかが分かるだろう。

当時、「accounting」を「計理学」か「会計学」のどちらにするかという議論がなされていた。「計理学」を主張していたのが、現在の一橋大学と専修大学で教鞭を執っていた鹿野清次郎である。鹿野は自らが設立・主宰した「計理学研究会」の拠点を専修大学に置き、活発な研究活動を行うとともに、計理士の育成にも尽力した。鹿野の存在なしにして「計理の専修」はなかったと言えよう。

4. 大学昇格

明治期、「大学」は、東京大学のような官立学校のみで、私立の大学は存在しなかった。そのため、現在の早稲田大学や慶應義塾大学は明治30年代から、私立の大学を認めるよう、政府に働きかけた。これを大学昇格運動という。この運動が功を奏して、1918（大正7）年に大学令が公布。この法令によって初めて私立大学が誕生することになったのである。

当初、専修大学は、実務者養成の学校たれという創立者たちの信念から、大学昇格の申請を見送っていたが、在校生・卒業生が一丸となって、大学昇格運動を展開。そのかいあって、1922（大正11）年、晴れて「大学令」に基づく「専修大学」となった。



5. 関東大震災

10万人を超える死者・行方不明者を出したと言われる関東大震災が起こったのは1923（大正12）年9月1日のことであった。神田神保町もこの震災によってほぼ廃墟と化す。専修大学も同様で、残ったのは図書館の外壁の一部のみであった。

しかし、復興に向けて学生、そして卒業生はただちに動き出す。学生会は帰省中の学生たちに向けて、瓦礫撤去の手伝いや、図書の寄贈を呼び掛け、全国各地の同窓会支部は、義援金や備蓄品を募り、大学に寄付するなど、母校のために立ち上がったのである。

6. 大学記念日

専修大学には、創立記念日（9月16日）とは別に大学記念日（10月30日）がある。これは創立者の相馬永胤と田尻稲次郎の2人が、1922（大正11）年10月30日に行われた学制頒布50年の記念祝典において、40年以上にわたって教育事業に従事した功労者156人のなかに選ばれたことに起因している。

私立大学関係者から選ばれたのは、相馬と田尻の2人のみということもあって、専修大学は大いに喜び、1925（大正14）年に学則改訂を行った際、10月30日を記念日として定めた。さらに、同日に開催した祝賀会は盛り上がり、以後、この日の前後に大学祭を開催することとなった。これが今に続く「鳳祭」にもつながっている。

7. 戦地へ向かう学生たち

1941（昭和16）年、アジア・太平洋戦争の勃発により、兵力の確保を目的として政府は高等教育機関に対して学生の修業年限の短縮を命じる。そのため、学生たちは繰り上げ卒業となり、陸海軍に入隊していくこととなった。さらに1943（昭和18）年10月には、文科系高等教育機関に在籍する20歳以上の学生に対して徴兵猶予の特権を廃止する。いわゆる「学徒出陣」である。

当時の専修大学は法律学・経済学・商学を主体とした社会科学系の大学であったため、ほとんどの学生が出征対象者となり、多くの若者たちが戦地へと向かった。また、残った学生も勤労動員に従事するなど、誰もが否応なく戦争に巻き込まれていったのである。

8. 生田キャンパスの開設

1949（昭和24）年4月、専修大学は戦後新たに制定された学校教育法に基づく「新しい大学」（新制大学）として再スタートをきった。生田キャンパスはこの新制大学としての認可を得るためにつくられたキャンパスで、現在のように神田・生田の両キャンパスを擁する大学となったのは、この時からである。

キャンパス整備は前年10月から始まり、大講堂や教室、食堂、図書館などが順次建てられていったが、神田キャンパスにはない「総合運動場」の建設も予定されていた。当時の後楽園と同型の野球場、テニスコート、陸上競技場、プールのほか、合宿施設も備えた運動施設で、いかに大学がスポーツに力を入れようとしていたかを知ることができる。

9. 総合大学への変貌

戦前の専修大学は少数精鋭の大学であったが、戦後は学生数を大きく増やし、大規模大学へと変貌を遂げる。戦前までの卒業生数はわずか1万5千人ほどに対して、いまや30万人余となったことがそのことをよく物語っている。

特に高度経済成長期には、経営学部・文学部などの新学部を次々と設置したほか、キャンパスを整備し、体育会の充実を図るなど、文系総合大学への道を歩み始める。その結果、1964（昭和39）年には、念願であった学生数1万人を超す大学へと生まれ変わったのである。生田キャンパス3号館は、この時期の「マスプロ教育」に対応すべく建てられた校舎で、その意味でも専修大学の象徴だったと言えよう。

10. 東日本大震災からの復興

2011（平成23）年3月11日、東北地方太平洋沿岸地域を中心に、広く東日本全域に甚大な被害をもたらした東日本大震災が発生した。当然、その被害は専修大学にも及び、なかでも生田キャンパスのシンボル的な存在であった3号館は大きな損害を受けた。

その3号館の跡地に新たに建てられた2・3号館（2017年4月稼働）は、音響・映像設備が充実したラーニングスタジオを中心に、アクティブラーニングを促進するための学習支援機能を集約した施設であり、震災復興の象徴として、そして生田キャンパスの新たな顔として、学生たちを迎え入れている。

4人の創立者

相馬 永胤（そうま ながたね）

1850～1924年。彦根藩士の家に生まれる。1871～1879年米国留学。コロンビア大学卒業後、エール大学大学院で法律学、経済学を学ぶ。専修学校初代校長、初代学長。法律科の講義を担当。

田尻 稲次郎（たじり いなじろう）

1850～1923年。薩摩藩士の家に生まれる。1871～1879年米国留学。エール大学卒業、同大大学院で経済学、財政学を学ぶ。専修学校では経済科の講義を担当。

目賀田 種太郎（めがた たねたろう）

1853～1926年。幕臣の家に生まれる。1870年米国留学。ハーバード大学卒。1875年留学生監督として再渡米し1879年帰国。法律科の講義を担当。

駒井 重格（こまい しげただ）

1853～1901年。桑名藩士の家に生まれる。1874年、旧桑名藩主の米国留学に随従し、ラトガース大学で経済学を学ぶ。経済科の講義を担当。